虞美人草「驚くうちは楽がある」

Junko Higasa

第 11 章で、甲野さんは藤尾を見下して言う。『驚くうちは楽(たのしみ)があるもんだ。女は楽が多くて仕合せだね』そして人込へ出た時、何を思ったかまた前言を繰り返した。『驚くうちは楽がある。女は仕合せなものだ』それから第 12 章で藤尾に言う。『楽のないものは自殺する気遣いがない』『御前のように楽の多いものは危ないよ』

「驚き」とは、新しいものに出会った時の感情である。従って目の前の光景が形を変えるごとに驚きが生じる。しかしそれが連続して慣れが生じると、刺激に対する麻痺が起り、少しのことでは驚かなくなる。だから驚きも段階ごとに大きくならないと満足できなくなる。刺激も満足も同時に増幅しなければならない。そして驚けなくなると楽しみがなくなり、それが亢進すると、生きているのか死んでいるのか判らないほどの虚しさを感じる。その感覚さえも麻痺してしまったとき自殺が起る。これは発展する文明の渦中の人間一般のことである。そして甲野さんが最初に言った『驚くうちは楽(たのしみ)があるもんだ。女は楽が多くて仕合せだね』というのは、まさに文明発展が加速していく当世の男女の立場と、そこから生じる感覚の違いを言ったのである。それは男と同様に角を出して戦おうとする藤尾に対する戒め的説明かもしれない。

しかし人込に出て繰り返した次の『驚くうちは楽がある。女は仕合せなものだ』というのは、おそらく藤尾と小野さんを念頭に置いた上での、男女一般の恋愛に対する感慨的自己問答であろう。年頃の娘は男の言動に驚きながらそれを手に入れる楽しみがある。また恋人の隠れた行いに驚きながら男を繰る楽しみがある。さらに夫となった男の変化に驚きながらそれを管理する楽しみがある。女の楽しみは一色ではない。独身の時から結婚後まで、驚きがあるごとに色を変えて続くのである。しかし男は違う。たとえ恋人の言動に驚くことがあったとしても、男の驚く楽しみは女を妻にしたときに終わる。男の楽は一色のみである。だから女は楽が多くて仕合せなのである。

そして藤尾が危ない理由は、『虞美人草』の底流にあるシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』（第一幕第三場）が物語る。クレオパトラが言う。「彼がどこで誰と何をしているか見ておいで：私の遣いだって言わずに：彼が悲しそうだったら、私は踊っているって言うのよ、愉快そうだったら、私が急病だと云いなさい：さっさと行ってすぐ戻っておいで」臣下のチャーミエンが案じる。「あまりあの方の気を引こうとなさいませんように；どうかご辛抱を：干渉しすぎるとやがて嫌われます」

藤尾は夫と定めたものの、まだ手に入れていない小野さんが他の女性と一緒だったことに驚いた。そこで小野さんに相手の素性を白状させるべく会話で攻めていった挙句、「博覧会に（あなたでなく）一さんにまた連れて行ってもらいます」と殊更ライバルを強調した鋭い言葉の槍を突きたてた。これは愛の優越感の楽しみである。しかし男が反応するうちはよい。もし反応しなくなったら...。男を追い詰める楽しみがエスカレートするとその感覚が麻痺して全てを失う結果となる。クレオパトラはやり過ぎた。アントニーの愛を確かめるために自分が死んだと偽ったら、彼は彼女の死を嘆き自殺してしまった。甲野さんはクレオパトラのような愛を持つ藤尾が、社会的身分の優越感を誇示する藤尾が、その比類なき栄華を失う日を心配する。　(2013.11.20)